Ｈａｗａｉｉ研修をおえて

東北大学病院　初期研修医（１年目）　吉田亜古

今回 Hawaii での研修に応募したのは、自分の研修に良い刺激となれば、また、将来海外留学するにあたって外国の医療に少しでも触れておきたいという思いからでした。併せて、英語の skill up になればという思いもありました。２つのコースの中で家庭医療コースを選んだのは、私は今まで家庭医療を学んだことも、携わったこともなく、日本より進んでいるといわれるアメリカの家庭医療を見たかったからです。

Hawaii での研修のなかで、家庭医療について触れ考えることができた事が最も貴重な経験だったように思います。

Hawaii での家庭医の仕事を見させてい頂いた際には、患者さんと深く関わっていく姿勢に驚きました。問診で主訴・現病歴を聞くのは当たり前なのですが、主訴に関わりのないように思われる、規則正しい生活を送れているか、食事は 1 日何回・どのようなものをとっているか、仕事はしているか、病気に関する家族の反応はどうだったか、最近強いストレスはないか、精神が不安定でないか、性生活は順調かなどを聞いていました。詳細に聞くことにより、主訴と関係する何かを発見できるかもしれない、そうでなくとも改善すべき問題を早く見つけて病気・ストレスの予防に努めるべきだと、先生は考えているとのことでした。日本ではここまで生活に介入した質問をしている先生を見た事がなく、非常に驚いたとともに、患者さんの背景に気を配るという点で家庭医らしい診療だと思いました。身体所見でも同様で、主訴とは関係なさそうでも、頭頸部・胸腹部所見、神経所見、耳鏡検査など一通りとっていました。「主訴がはっきりしているなら重点的に関連項目の所見をとればいいけれど、主訴があいまいな場合は全身を見るようにしている。そうすれば新たな何かが見えてくる。」と説明してくれました。見学前は、家庭医は患者さんの全身を診るものと思っていましたが、実際は患者さんの生活背景を含めたすべてを診るものである事を知りました。

また、日本の家庭医療について考える時間があった事も私にとっては貴重な

時間でした。この研修に参加するまで、私は日本の家庭医療に触れたことがなかったのですが、家庭医療部の教授である葛西先生、家庭医療コースの後期研修医である若山先生から様々な話を聞く事ができました。日本では家庭医の認識が不十分であること、家庭医を目指すひとが少ないこと、家庭医の質を維持しつつも数を増やすことの難しさ、家庭医療体制が不十分であり、それゆえ外国で家庭医療レジデントコースをクリアしても日本ではその力を十分に発揮する場がないことなど、日本の現状を一番理解している先生方の率直な意見を聞けたことで、わずかですが日本の現状を知ることができ、非常に勉強になりました。

この研修で英語の必要性、コミュニケーション能力の必要性を実感したことも貴重な経験でした。現地では怒涛の英語漬けで、クリニックや Hilo Medical Center の ER では 1 対 1 でドクターについて見学し、施設の説明を受ける時、食事会など場では質問をする機会も多く、非常に濃密な英語の訓練になりました。もちろん、出発前から英語を少しでも上達させるために勉強・訓練しましたが、やはり、十分なコミュニケーションがとれるほどの英語力は身につきませんでした。そのため、聞くのが精一杯で自分の考えがまとまらず、思うように話せず、せっかくの学ぶ機会を十分に活かせなかったように思います。コミュニケーション能力についても同様で、相手が話すことを傾聴し質問する、新たな話題を持ち出すなど当たり前の事が出来ず、相手にやや不愉快な思いをさせてしまったように思いました。これらに関しては今でも非常に後悔しており、その気持ちは今の英語の勉強へのやる気や、普段の研修で積極的に質問する姿勢につながっています。

そして、病院研修ばかりではなく、ロコモコを食べたり、Rainbow Falls を見たり、遠くからマウナケア山頂上の天体望遠鏡を見たり、キラウエア火山に行ったり、虹を見たりと Hawaii を楽しむこともできました。

非常に多くの経験ができたこの研修が今後の自分にどのような影響を及ぼすかは予測できません。しかし、視野が広がったことで、将来を考える際に世界を見据えた考え方ができるようになったことは間違いないと感じています。最後になりましたが、研修をコーディネートして下さった事務の方、引率の先生方、本当にありがとうございました。